



カントウータ

Cantuta No.20

平成 25 年 2 月 1 日発行

目 次

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 事務局からのお知らせ | 4. 日系人を追う一旅の始まり |
| 2. 椿新ボリビア大使の年頭のご挨拶 | 5. ¡Dios mío! は、関西弁？ |
| 3. ボリビア経済の今日：天然ガス生産の見通し | 6. ボリビアで日本語を教えたい |
| | 7. じゃがいもの旅の物語 (18) |

事務局からのお知らせ

協会主催講演会・懇親会の開催

2012 年 12 月 14 日（金）午後 5 時半から、西麻布のラテンアメリカサロンにおいて、協会主催の講演会と懇親会を兼ねたクリスマスイベントを開催しました。目標としていた 40 名（内会員 21 名、非会員 19 名）の方々のご参加を頂きました。

講演会のテーマは現在注目を浴びるウユニ塩湖を巡る鉱物資源、観光資源についてでした。

1.ウユニ塩湖のリチウム開発と人材育成

講師：山形大学大学院理工学研究科准教授

綾部 誠氏

2.ボリビア観光の現況（ウユニ塩湖ブームを中心として）

講師：(株)ラティエノ 代表取締役

田中 純一氏

2つのテーマについて専門家のお二人の講師から、パワーポイントを使って各々40分の懇切丁寧な説明がなされ、参加者の方々からも大変好評でした。講師の御二人には改めて厚く御礼を申し上げます。

昨年来、マスコミなどでもボリビアについて観光地としてのみならずリチウムをはじめとする鉱物資源も含めて、関心が徐々に高まりつつあり、協会への取材や照会も増加の兆しが見えます。

今回のイベントでは、会員外の方々のご参加が約半数を占めたことも、日本の一般の方々や社会のボリビアへの興味が高まってきている証拠と思われまます。 両国間の交流促進を目的とする我々協会にとっても大変勇気づけられます。

講演会に引き続き、立食形式の懇談会を行いました。フォルクローレの演奏もあり、最後はボリビアの伝統的ダンスを輪になって踊り、盛況のうちに無事終了しました。



写真 1. 盛り上がったクリスマスイベント

同時に行ったアンケートからも次回を期待する声が多く寄せられており、これらも参考にさせて頂きながら、また、本年も新たな企画に取り組んで参ります。

皆さまには是非、下記協会ホームページをチェックして頂き、協会のイベントの企画などにもご参加いただきたく存じます。

協会へのご要望やご意見をお寄せ頂くよう、お願い申し上げますと共に、まだ会員に未加入の方は、是非入会頂けると大変有難いと思う次第です。

日本ボリビア協会事務局連絡先

電話：042-673-3133

e-mail：admin@nipponbolivia.org

協会 HP：<http://nipponbolivia.org>

樁新ボリビア大使の年頭のご挨拶

ボリビア多民族国家特命全権大使
樁 秀洋

新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては爽やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

私にとって、2012年は大きな「変化」の年でした。7月下旬に突然帰国命令を受け、9月4日に、1年11ヶ月勤務し多くの友人と貴重な経験を得ることができたバルセロナを後ろ髪を引かれる思いと新たな決意を胸に秘めながら後にしました。

そして、9月12日付で駐ボリビア多民族国大使を拝命し、10月22日に31時間の長旅の末、世界一高い空港と言われる標高4050mのエル・アルト空港（ラパス）に到着しました。

ラパスでは大使館は3600m、公邸は3200mの場所にありますので、毎日400mの高度差を往復していますが、91年から3年間、高度2300mのメキシコ・シティに勤務した経験が功を奏したのか、今のところ高度の影響はそれほど受けていません。毎朝、小鳥の軽やかなさえずりで目覚めるのですが、スズメや胴体が黒く嘴と脚が黄色でヒヨドリより小さいチワノクが、餌を探しながらもの凄いスピードで芝生の上をピョンピョン駆け回り、大型のハチドリが蜜を吸いながら飛び回っている光景を、紫煙をくゆらせながらベランダから眺めつつ一日の活動に思索を巡らせるのが日課になっています。「ラパスでは煙草

を吸ってはいけない、お酒を飲んではいけない、走ってはいけない」とのアドバイスを受けていたのですが、いつしか煙草を吸い、ビールやワインを嗜み、先日はソフトボールの試合で走ってしまいました！ボリビアは全てがアンデス山脈の高原に広がっている国だと思われがちですが、実際には国土の60%はアマゾン源流の平原地帯。今は夏ですが、ラパスでは最低気温4℃、最高気温12℃ほどの気候なのに、東部平原地帯は最低気温23℃、最高気温35℃と大きな違いがあります。高原地帯と平原地帯に挟まれた峡谷地帯では野菜やコーヒーやココアの栽培が行われており、食糧も東部平原地帯のオキナワ移住地やサンフアン移住地に入植した日本人移住者の方々の大なる貢献もあって、現在では小麦を除けば全て自給できる体制が整っています。この5年間で一人当たりGDPも倍増しました。かつての「中南米諸国の中でハイチと並ぶ最貧国」という定義は当てはまらなくなりつつあります。

着任以来これまでに、ボリビア最大の都市で経済の中心地となっている東部平原地帯のサンタクルスとオキナワ・サンフアン両移住地、12月21日のマヤ暦が終了する日には、湖上に浮かぶ「太陽の島」で開催されたパチャクティの式典に出席するためチチカカ湖を訪れました。新年早々は1月3日に「天空の鏡」として近年日本人が一度は訪れたい場所のひとつとして評判の高いウユニ塩湖（世界最大のリチウムの埋蔵量を有していると言われてるところ）の湖畔で、モラレス大統領が出席して開催された炭酸リチウム抽出のパイロット・プラント（日本の官民が全面的に協力しているプロジェクト）の開所式に出席するため空路ウユニまで出張し、4日は陸路14時間をかけて、ウユニから植民地時代のスペインの富の源泉となった銀鉱山のあるポトシ、リオを凌ぐと言われるカーニバルで有名なオルロを経由し、アルティプラノを縦断してラパスに戻ってきました。ボリビアはその地理的文化的人種的多様性もあって「理解するのは困難だけど決して忘れることのできない国」と評されているそうです。動植物も実に多彩です。モラレス政権はボリビアの現状を「変革

のプロセス」にあると定義していますが、徐々に行動半径を広げながら、できるだけ多くの人と語り合いながら、より広く深くボリビアを理解しながら、日本とボリビアの友好協力関係の深化に貢献したいと念願しています。

本年もどうぞ宜しくお願い致します。

2013年1月7日

ラパスにて 椿 秀洋 拝

注:当協会に届きました年賀メールをご本人の承諾を得て、転載いたしました。

ボリビア経済の今日：

天然ガス生産の見通し

筑波大学特任研究員

岡田勇

2012年のボリビアは、天然ガス輸出を主軸とする経済好況期を謳歌し、この傾向はあとしばらくの間は継続すると見られている。この好況は歴史的に未曾有のものであり、現在のボリビアを理解する上で決定的に重要であり、ボリビアの将来を占う上でカギとなるものでもあるので、何が起きているかを明らかにしてみたい。

ボリビア経済は、2001年からの10年間でドラスティックな変化を遂げた(表参照)。国内総生産は約3倍、国家歳入は4倍強、外貨準備高は11倍強に膨れ上がった。もちろん、この好況は天然ガスだけに依存するものではない。住友商事のサンクリストバル鉱山を始めとする鉱業生産の増加、統計には表れてこないコカイン経済や密輸経済による外貨流入も視野に入れる必要がある。しかし、鉱業部門では労働組合他の利益団体による抗争が続き、新規民間資本が途絶えているため、堅実な基盤があるとは言い難い。違法経済やインフォーマル経済についても、経済人口の50%以上を吸収していると言われるものの、その実態は極めて不透明である。それら他産業が確固とした基盤とは言い難い中で、天然ガス輸出はブラジル・アルゼンチンとの政府間協定によって中長期的に市場が

確保され、2005年の炭化水素法成立と2006年の「国有化」によって利益配分方法が制度化されており、マクロ経済安定の基礎となっている。毎年の予算法では天然ガスの売却見込価格にもとづいて予算規模が決定されており、国家予算のベースでもある。そして2000年以降の社会紛争や2人の大統領辞任といった政治危機は、もちろんそれが全てではないが、すべからく天然ガス採掘産業の在り方を巡って争われてきたと言える。

天然ガス生産に注目しなければならない理由はさらにある。外貨獲得の基礎である総輸出額のうち、約半分が天然ガス輸出によっている。関連産業を含めると国家歳入の多くがこの非再生可能資源に依存する。研究系NGOであるFundación Jubileoが2012年に発表した報告書によれば、天然ガス生産量×売却価格の32%となる炭化水素直接税、同じく18%になるロイヤリティは、年金支給(全支出の26%)や中央政府の経常支出(同19%)に多くが回されている一方で、新しい財源を作るための公共投資は全支出額の3分の1に満たない。すなわち、天然ガスからの収益は、政府機関の維持や年金などの社会保障にとっての基礎ともなっており、この傾向は継続していくと見られる。

(<http://www.jubileobolivia.org.bo/>よりダウンロード可)。

もし仮に天然ガス生産が無くなった場合にどうなるかをイメージすると、そのインパクトがよく分かる。政府の歳入が減少し、公務員解雇、年金や婦女子・学童に対する各種補助金の停止、補助金によって抑えられている小麦、石油燃料等の値上げといった問題が生じる。しかし、社会的にそのようなショックが受け入れがたい場合、海外からの借入によってしばらくは担保せざるを得なくなり、対外債務が増加する(現在の債務残高は、2006年までの債務免除によって総輸出額の35%程度に低く抑えられている)。対外債務の激増は、ともすれば1980年代のハイパーインフレのような大規模な危機へと結びつきかねない。このよう

な危機はもっと早く訪れるとの見方も可能である。ひとたび天然ガス生産が枯渇に向かって失速を始めると、多くの人々は上記の危機を予測して、現在過半数の国民が信用している自国通貨ボリビアーノスを見限って安定した米ドルに殺到したり、預貯金の逃避を始めかねない。そうした場合、これまで際立った上昇を見せてきた外貨準備高は市中の米ドル需要に対応するために急激に減少し、同時に中央銀行が操作する公定為替レートは維持できなくなるため、これらがさらに安定性を掘り崩して危機を加速化させる恐れもある。

では、天然ガス生産の見通しはどうか。2005年に外資系 D'Golyer&MacNaughton 社が行った調査では、26.1兆立方フィート(TCF)の確認埋蔵量、探査を行った上で発見される可能性がある推定埋蔵量を含めると63.9TCF存在するとされた。しかし、2009年に Ryder&Scott 社が行った調査では、確認埋蔵量は9.94TCF、推定埋蔵量を含めても19.92TCFしかないと発表された(ボリビア石油公社 HP 参照(www.ypfb.gob.bo))。これは、より精密な調査を行った結果とされるが、これでは毎年0.5TCFを消費したと考えると、確認埋蔵量だけならば20年持つか持たないか、という程度である(2012年12月21日付Página Siete紙におけるアラルコン炭化水素エネルギー省探査・採掘担当次官の発言参照)。さらに、Latin American Dialogueの2012年8月の報告書では、ラテンアメリカ域内のエネルギー消費量は例年3%前後の割合で増加傾向にあるとされており、その場合枯渇への脅威はより早く訪れる。

この苦境を前にして、政府はガス田新規探査を促進する政策を積極化している。2011年5月には仏資本の Total E&P Bolivia 社が Aquio ガス田にて3TCF相当を発見したと報じられ、新規ガス田発見の可能性はある。最大の障害は、「国有化」政策により多額の税収や国家の資本参加が規定されている上、投資法等の関連法制度が未整備であるために、中長期的投資を行うにはカントリー・リスクが高く、多国籍企業の多くが新規探査投資を

手控えていることにある。関連法の整備については、環境規制や住民協議をいかに制度化するかが課題となっている他、政府内外の左派イデオロギーを持つ一部勢力との調整が必要となる。いずれにしても、「国有化」以前よりさらに投資家を優遇するインセンティブの導入が必要とされる。2011年12月にボリビア石油公社(YPFB)は2020年までの探査・採掘計画を発表し、新規探査投資によってガス田・油田が成功裏に発見された暁には、投資額を全額保証することを発表した。またYPFBは世界各国での投資誘致キャンペーンを行い、ベトナムやロシアの国営企業にも秋波を送っている。さらに若干性質は異なるものの、2012年4月18日付の大統領令第1202号は、発見された石油に対して1バレルあたり30\$を支払うことを決めた。その背景には、石油燃料、特にディーゼルの生産高が少なく、急速に伸びている自動車燃料消費への対応がひっ迫しており、ベネズエラから輸入した上で、補助金をつけて低価格で国内需要をまかなわざるを得ず、財政を圧迫しているという実情がある。

もう一つの問題として、天然ガスの大口顧客であるブラジルとアルゼンチンの動向を指摘できる。南米市場の中で、ボリビアの天然ガスはベネズエラに次ぐ埋蔵量を占め、チリ、アルゼンチン、ブラジルといった南米南部の大国への供給が大いに期待された(堀坂浩太郎(2008)『南米南部地域における天然ガスのインフラ整備と地域統合—国家主義的発想と地域主義的発想のはざま—』ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ no.16、上智大学イベロアメリカ研究所)。しかし、ここ数年、アルゼンチン北部では大規模なシェールガス資源が、ブラジルでは大西洋の沖合油田の発見があり、これらの大口顧客がボリビアの天然ガスに依存し続けるか否かは、必ずしも自明ではなくなっている。2003年、2005年にわざわざ2人の大統領を追い出してまで問題にした宿敵チリへの天然ガス輸出について、与党国会議員がその可能性に言及するようにもなっており、現実的な選択を迫

られる日もやってくるかもしれない。これらは地域外交にも結び付く重要なテーマである。

ボリビアは、天然ガスや鉱業といった資源に依存するため「狭い土台(base estrecha)」に置かれていると言われてきたが、その傾向は未だ変わっていない。天然ガスによる好況は極めて良好なマクロ経済をもたらし、それは政治的安定にも相当貢献していると言えるだろう。しかし、資源好況の終焉もいつかはやってくるのである。

表：マクロ経済指標の推移
(2001年、2006年、2011年分)

	2001	2006	2011
国内総生産(a)	8129.2	11383.5	24251.8
輸出額(b)	1352.9	4231.9	9109.3
天然ガス輸出額(b-1)	289.3	2014.0	4114.5
鉱物の輸出額(b-2)	334.5	1061.4	3415.3
外貨準備高(c)	1077.0	3178.0	12018.5
歳入(d)	2479.0	4449.0	10818.0
歳出(e)	3033.0	3937.0	10621.0
経常支出(e-1)	2354.0	2749.0	7457.0
公共投資(e-2)	639.0	879.0	2153.0
外国直接投資(f)	703.0	278.0	859.0
対外債務残高(g)	4497.0	3248.3	3577.0

(注) 単位は全て百万ドル
(出典) 著者作成。(a), (b), (b-1), (d), (e), (e-1), (e-2)は経済財務省、(b-2), (c), (f), (g)は中央銀行のデータから

日系人を追う——旅の始まり

ノンフィクションライター

佐藤 葉

南北に連なる山々は雪に覆われ、目の前に壁のようにそそり立っている。アメリカ、カリフォルニア州のシエラネバダ山脈。最高峰はホイットニー山の4,418mである。

その山々の麓まではどのくらいの距離があるのだろうか、ただただ砂漠である。砂というより細かい土、土漠が、風いだ海のように広がっている。所々に、枯れた草の塊が見える。何回かこのモハベ砂漠には来たことがあったが、あらためて見回すとその荒涼さにたじろいだ。ときおり強い風が

吹いて、細かい土を巻き上げ、辺りはぼうっと霞む。

この地には、太平洋戦争中、日系人の強制収容所があった。写真家アンセル・アダムスのモノクロ写真には、掘っ立ての長屋が何十棟と建ち並んでいた。そしてその周囲には、有刺鉄線がめぐらされていた。たとえ逃げたとしても、近くの町まではかなりの距離がある。それに、ガラガラヘビもいるから、行き着くまでに倒れただろう。

注意しながら散策すると、かろうじて生き残った木があり、木の下には石を組んだ池が半分土に埋もれるように残っていた。日系人たちは、過酷な地であっても少しでも快適にと、環境を整えたのである。

毎年4月末、日系人たちが中心となってこの「マンザナル収容所」跡へ、巡礼の旅を行っている。牧師と僧侶により、亡くなった人々のために建てた慰霊碑に祈りが捧げられる。

この巡礼の旅に参加したことにより、私は日系の人々と親しくなった。そして、日系人の歴史を調べ始めたのである。すると、アメリカの日系人強制収容所には南米の人々も送られていることが記されていた。私の関心は、南米にも広がった。

20代の頃からfolkloreに、マチュピチュに、ナスカの地上絵に興味を持っていたのだが、それは単に楽しみ程度のもので、南米の大地やそこに生きる人々にまでは、思いも想像もしていなかった。

それでも南米への関心は強まっていき、ブラジル関係のボランティアをしていたところ、日伯修好通商条約100周年記念の日系社会との交流事業に声をかけられ、チャンス、とばかりに参加した。ブラジルでは、日系人の家庭にホームステイした。大変歓待され、日系人の日本に対する熱い思いに圧倒された。

以来、日系人を追う旅をしている。ボリビアへの旅は、カントゥータにかつて書いたような気がする。その後も、ボリビアで会った人の親戚を訪

ねて沖縄へ、ボリビア出身の人々を訪ねて神奈川県内を、と今も少しづつ話を聞き続けている。そしてもう一度、ボリビアで話を聞きたい。

何年かかけて人々に会い続ける中で、私の日系人に対する「関心」は変化し、今では「気になる人々」、「近くにいる人々」になっている。

ところで、マンザナール巡礼への参加直前、レーガン大統領が強制収容に対して謝罪し、一人 2 万ドルの補償金を支払うニュースが流れた。その新聞記事を、巡礼の折に日系の女性に見せ、どう思うか聞いたところ、「たったそれっぽっちで……」と、固い表情で記事を見やり、あとは言葉がなかった。戦争前から日本人排斥運動が起こり、強制収容により財産と呼べる物をほとんど失った人々にとって、2 万ドルは安すぎるだろう。しかし、謝罪するということが、補償金を出すことは名誉回復への第一歩に私は思えたので、感想を聞いてみたのである。

真鍋辰夫氏は、ペルーから収容された日系人に対しての扱いを、『ボリビアに生きる——日本人移住 100 周年誌』の中で次のように書いている。ビザなしで入国したために不法入国者として扱われ、補償金は支払われなかった。そこで日系弁護士を通じて米務省に上告、交渉を続けた結果、クリントン大統領の詫び状と一人 5000 ドルの小切手が送られてきた。ボリビアからの収容者 7 人に対しては、6 人に詫び状と 5000 ドルの小切手が、残る一人には詫び状だけで、補償金は後ほど送られるという連絡があったとのことである。

¡Dios mío! は、関西弁？

駐日ボリビア大使館秘書

三浦光

スペイン語の Dios mío は、日本語では、「大変」「ひどい」「信じられない」「最悪」「最低」「何ですって」「どういうこと」「まったく」「それはないでしょう」「ショック」など、様々な言い方が可能ですが、場合によっては、まだまだいろいろな訳が、出てきそうです。それというの、

悲惨な状況ばかりではなく、驚きを伴う喜びにも対応するのが、Dios mío だからです。

ドイツ語でも、Mein Gott とか、Gott, Gott, Gott とか、どこか優しい感じがしますし、英語の Oh! My God は、なぜか、トンボが羽をばたばたさせているイメージです。

日本語の場合は、こんな時、どんなイメージが浮かんでくるかというと、『なんやねん、それ』という感じで、タレントのさんまさんが、かすれた声で、盛んに唾を飛ばし、右に左に笑いを振りまいている様子が浮かびます。その時の、「Dios mío」は、「ほんと」「すごいね」「最高」「すばらしい」「いいやん」「まじで？」などになるのでしょうか。

スペイン語で、「ありがとう」は、「gracias」です。「gracia」という、女性名詞に複数を表す「s」をつけたものです。意味は、恩寵、恩恵、恵みなどです。「おかげさまで」を意味する「Gracias a Dios」も、意味的には重複しますが、すべての事物が神様からの賜物と思えば、つじつまが合います。「Que Dios le pague」や、「Dios se lo pague」も、なんとなく分かってきます。つまり、私という人間は、お返し、お支払い、お礼は出来ないけれども、神様が貴方にお返ししてくださるでしょうという意味になります。

一方で、日本語はというと、やはり、「おはよう」とか「こんにちは」とかと同じ様に、目の前の状況をそのまま描写しています。有り難しということで、わかりやすいです。ところで、「¿Cuál es su Gracia?」と、聞かれることがあります。そんな時は素直に自分の名前をいうしかありません。ちなみに、アイマラ語の、ありがとうは、「ユスパハラ」とか。「Que Dios le pague」に関係ありそうです。

スペイン語でも、ドイツ語でも、「すみません」は、二分できます。ドイツ語では、「Entschuldigung」で、「ent」と「schuldigung」に分けることができます。スペイン語も、「dis」と「culpe」に分けることができます。動詞の「disculpar」の意味は、許す、容赦するというこ

となので、実際に使うときは目的語が必要になります。ですから、スペイン語でもドイツ語でもその後の言い訳が長くなります。日本語はというと、「すみません」で何でも済んでしまいます。それだけではなくて、時には、感謝していたり、お願いしていたりで、この「すみません」にいろいろな気持ちが込められます。こうなると一言では済まないことになります。多様な「すみません」の多用は、日本語という同じコードを使う社会では、円満に生き抜く知恵なのでしょうが、対外的には疑問が残るかもしれません。それにしても、最近私が気に入っているフレーズは、「まっこと、すまぬ」です。しかし、坂本なんとかさんに、「それはいかんぜよ」とか言われそうです。

ボリビアで日本語を教えたい

旅行作家
木賀賢一

時計の針を逆回転すること15～16年前。私は新潟県の妙高高原町役場に奉職していた。45歳を過ぎたころから、自分の職業は公務員一筋でいいのだろうか。もっと違う人生・進路もあるのではないか、と日増しに思うようになっていた。

50歳になれば勸奨退職に該当することを聞き、割増退職金や60歳で受取る共済年金額等調べてもらった。結論は「よし、50歳になったら今までは違う人生を歩こう。違うルールに乗換えよう」と心に決めた。

これから少し自慢話風になるので、読み飛ばしてもかまわないが、当時私は行政の中核である企画部門に長く在籍していたので、他の職員では味わえないような多くの体験をした。これがいま懐かしい思い出となっている。

いくつか紹介すると・・・

- ① 災害救助犬がスイスのツェルマット村から日本に贈呈された。引き続き、それを妙高高原町に引き渡す式典が首相官邸で行われた。この贈呈式に町長と共に出席した。これらの手配・準備に係ってきたためである。

- ② オーストリアの姉妹都市と市民間交流が始まった。その第1回目の交流の時、職員代表として、バードガシュタイン町を訪問し交流をしてきた。
- ③ 町の史跡である関所跡整備事業に係わった時、関所入口の長寿橋の脇に当時長寿で大人気だったキンさん・ギンさんの坐像と手形を設置することになった。町長から命令を受けて、キンさん宅を訪問し数々の依頼をしてきた。竣功式にはお二人から妙高高原町まで来てもらい、橋の渡り初めまでしてもらった。この時、お二人の案内役を担当した。ギンさんから「あんた、私の孫になりなさい」と言われたことが印象深い。
- ④ 上記の関所跡整備事業を担当していた時だった。この事業を実施するため、国土庁や新潟県の補助事業を幾つも使って財源の確保を図ってきた。平成7年3月21日、国土庁の入る霞が関庁舎で、9時から新年度事業のヒヤリングが予定されていた。ところが前日の20日、オウム真理教地下鉄サリン事件が発生し、霞が関駅で多くの死傷者がでた。あと一日違っていれば、自分も犠牲者の一人になったのではと思う。
- ⑤ 当地と縁のある沖縄宮古島で、地域間交流に参加した帰りの日、台風に遭遇。しかもUターン台風というおまけまでついた。1週間以上も宮古島に足止めされたが、島の役所の人から観光案内してもらい、おいしいオリオンビールを連日堪能した。

あと、自治大学での長期研修・妙高山を描く絵画展の創設など、数えれば枚挙にいとまがないが、他人の思い出話などあまり面白くないと思うので、これで終了する。とにかく以上のようなことを経験しつつ、50歳で退職した。

退職後最初にしたのは、ピースボートに乗って100日間の世界一周の旅に出た。ピースボートといっても、手で漕ぐような冒険ボートではない。かといって飛鳥のような豪華客船ではないが、平

和というテーマを掲げ、23の国に寄港し、その国の人々と交流をしながら、世界に平和を訴えていく活動の船旅である。この100日間で自分自身が大きく変わり、世界観も大きく変わった旅であった。

次に行ったのが、約2カ月半に及ぶアンデスへの旅である。スペイン語の難しさに四苦八苦しながらも、高原の大地に吹く心地良い風を感じながらの一人旅であった。旅を続けていると、行き先々の土地の匂いが分かる。そして、この先を曲がれば、どんな光景が広がっているのだろうか、といつもワクワクする。こんな何でもないようなことも楽しくて、一つ一つが換え難い思い出となっている。

いろいろな場所でペルーの人々に接し、時には笑い時には涙を流し、不思議なインカやナスカの遺跡に深い歴史の流れを感じた。歴史といえば、約100年以上前の初期日本人移民の方々の苦難な歴史を聞いたとき、あまりの壮絶さに涙がポロポロ、いつまでも止むことがなかった。ティティカカ湖ではウロス島やタキーレ島に渡った。帰りの船では、嵐の中強引に出港したせいであわや転覆の大騒ぎ、遭難寸前で九死に一生を得た。でも島の上から見た湖は、限りなく青く澄み美しい。次回は、ボリビア側の太陽の島・月の島に行こうと思っていた。

そしてまた、アレキパのレストランでフォルクローレの演奏を聴いたとき、こんなにも美しい旋律と音色の音楽があるのかと、体の中に力強い感動を感じた。帰国後すぐに、アンデスの民族楽器を教える先生についてケーナを習い始めた。

このようにアンデスの美しい景観とフォルクローレの音色に魅せられ、いつの日かまたアンデス地方を訪ねたいとずっと思っていた。この願いが、今ようやく実現しようとしている。ここ数年勤めていた福祉関係の仕事や各種行政委員を12月で全て辞め、今はボリビア行の準備を始めている。それは、日本ボリビア協会を通じてボリビアで日本語を教えることをお願いし、現地機関と交渉中

である。日本語教師の資格はないが、地元で中国人に日本語を教えてきた経験と南米に対する私の思いを活かせればと思う。そして、アンデスの音楽、フォルクローレ、特にケーナという楽器を通して、ボリビアの皆さんと楽しく交流を図りたいとも思っている。

ボリビアにおける日本語教師はまだ決定ではないが、これから色々な要件をクリアして、是非ボリビア行きを実現しようと思う。それにはスペイン語をある程度理解できなければ、コミュニケーションがスムーズにいかない。行くまでに少しでも単語の数を増やし、動詞の活用形をマスターするなど、やらなければならないことがたくさんある。

そうは思ってもなかなか思惑どおり動かない。こういうときは少し気分転換に仲間と俳句作りをしている。俳句は日本語の文化であり、日本語を覚えるにはもってこいの手法だと思う。単なる言葉遊びではなく、日本人の繊細な感性の表現について、俳句をとおしてボリビアの皆さんと文化交流を図っていきたいと思う。

さて、ボリビアではどんな人と出会い、どんな感動を私に与えてくれるのだろうか。



写真2. ティティカカ湖:次回はコパカパーナの町から入ろう

ジャガイモの旅の物語 18

日本ボリビア協会 副会長

杉田 房子

アンダルシア平原を、セビリアからコルドバま

で、インカの男女は馬車に揺られていた。セベリアからコルドバまで、インカの男女は馬車で揺られていった。セベリアの町を外れると、道は石畳から野道に変わる。車輪が掘り返った筋だらけの道で、馬車は揺れるというよりは跳ねまわった。

「これでは、馬に乗るのも上手なはずだ」アンデス山地で、手足のように馬を操っていた白い人ビラコチャを、インカの男女はまざまざと思いだしていた。家畜といえば背丈ほどのラマやアルパカしか知らないアンデスの人々に、この馬がどれほど巨大に見えたことか。それに、ここには馬よりどっしりとした牛という動物もいっぱいいた。麦という、これもアンデスでは見たこともない穀物を車に山ほど積んでも、牛は平気で車を引いていく。

大きな家畜がないので、アンデスの人々は車を知らなかったから、初めは面白がって馬車に乗っていたインカの男女も、あまり揺れ方に気持ちが悪くなった。

しかし、車をおりて歩きだすと、鉄道にやたらに落ちている馬や牛の糞がたまらない。一緒に歩くスペイン人のチーズのような体臭も、胸にむつとくる。

パンとチーズと凝乳と
食事はその繰り返し
それでふさがる腹のなか
だから 農夫はポーッとする
だから 農夫は阿呆顔

中世の末頃、中央ヨーロッパ北部のケールレンリート地方に、こういう農民の歌があった。穀物は変にソバ。豆はエンドウにソラマメ。野菜はキャベツにホウレンソウ。

根菜はカブにニンジンに大根。植えるものも、耕地も限られていた。それも、冬撒きと春撒きとに分けて、収穫を一年中保たせようとするれば、口に入れる食物は単純になるし、量も多いとはいえない。麦など、蒔いた種の五倍の収穫があれば、豊作を喜んだ時代だった。

チーズにしてさえ、たっぷりとはなかった。リ

ューベック地方のラッセルブルクには、1万4975戸の農家が牛、牡牛、牝牛、羊あわせて13万9396頭を飼っていた記録が1630年にある。平均で一戸当たり十頭近くなるけれど、牝牛は3万3194頭だったから、一戸当たり、2、3頭にしかすぎない。仔牛に乳を飲ませれば、それほど多く人間にまわってこなかったにきまっているが、乳からバターやチーズを作る技術も進んでいなかった。フランドル地方では牛乳30リットルでバター1キロがやっとなれた。

インカの男女は知らなかったが、実はヨーロッパの白い人は誰でもが、チーズ臭くなるほど満腹していたわけではないのだ。

旅の夜、インカの男女がじゃがいもを焼いて食べだすと、宿を借りた家のまわりは大騒ぎになった。

「パンを焼いていると思ったら、根だって」
「根じゃない。カブみたいな根菜だよ」
「パパス、パタタ、パタタ・・・とかいったね」
(つづく)

新入会員

安堂和佳子氏 (NPO 法人 DIFAR メンバー、サンタクルスで日本語補習校臨時教員を勤める)

ボーモント愛子氏 (Essentially 株式会社代表)

濱満靖氏 (JICA 勤務)

伊藤昭雄氏 (元在ボリビア大使館サンタクルス出張駐在官事務所領事)

会員訃報

2011年永田晃氏がお亡くなりになりました。
2012年2月土橋洋氏がお亡くなりになりました。
謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

(編集委員)

白川光徳 杉田房子 杉浦 篤 金木克公
細萱恵子